

7月4日、壮年会法座での会員発表-1 July



「ほどく／ほどけ(る)、ゆるす／ゆるむー自力と他力」

上古代の日本には「文字」がなく、やまとことば(話し言葉)を用いた会話でコミュニケーションをとっていました。

六世紀に中国から漢字が伝わると、音読(中国語の発音で読む)と訓読(漢字を和語=やまとことばの意味をあてて読む)が発明されました。

野口三千三さん(野口体操創始者)は、「解(カイ)」の訓読みである「ほぐし／ほどけ」について、一「ほぐし」は「ほどき・ほごし」と同じコトバである。「ほどき」はもとも「ほ」と清音で、「ほ」の状態になるように解くことである。和語の「ほ」は、漢字を利用して「火・炎・穂・呆・包・豊・放・惚」である。(中略)「とき」は「解・溶・融・釈・説・時」である。「ほどき」の自動詞形は「ほどけ」で、もともとは「ほとけ」(清音)であったこの「ほとけ」こそ、実は「仏(ほとけ)」の語源なのである。一と解説しています。

「とく・ほどく、ゆるす・ゆるめる」(他動詞)には、固く結んだ靴の紐を「と(解)く」動作、自分の意思で相手を「ゆる



(許)す」行為など、身心を無理に「ゆる(緩)める」(自力)のイメージがありますが、「とける・ほどけ(る)・ゆるむ」(自動詞)には、靴の紐が自然に「ほど(解)け」た、気づくと「ゆる(緩)んで」いたなど、(他力)のイメージがあります。身心の自縄自縛を(自力)で「ほど(解)く」のか、あるいは(自力)にこだわる執着を「と(解)き・はな(放)」ち、(他力)のはからいに任せて「ほど(解)ける」のか……。

また、(自力)で「ゆる(許・赦)す・ゆる(弛・緩)める」と、(他力)のはからいに任せて「ゆる(弛・緩)む→ゆるんだ」のとは、その意味合いが異なってきます。

野口流のやまとことば(言霊)身体論は、あらゆる束縛からの「ほど(解)け」によって、この生き身まるごとの「ほどけ(身心の解放)」を体感するメソッドであり、しかも、永遠の「ほどけ」を追い求めるのではなく、一瞬一瞬、今の「ほどけ」を大切に、生死一如をひと連なりに生きる、「仏(ほとけ)」のはたらきに任せる生き方ではないでしょうか。

(原山 建郎 記)

9月7日、壮年会法座での会員発表-2「仏教と私」September



仏教は広く、とても全体的には分かりやうがないので、その中で、わかったこと・わからないこと・納得したこと・納得できなかったことを断片的ですがお話しします。自分は戦争経験のない昭和24年生まれですが、「自分とは何か・どんな存在か」という疑問は、学生の頃からありました。映画でも、俠客映画とか、「人間の条件」とか、歌でも「時には母のない子のように」などかなり暗い感じの時代のせいもあるかもしれませんが。会社に入って経済協力の仕事でイスラムの発祥の地といわれる最貧国のイエメンに出張で行った時、明け方のコーランの響きに飛び起きて、宗教の生活の現状に驚き、また子供たちの瞳の輝きに日本の子供の暗い目と比べて、幸せとは何かと感じました。

その頃から中原寺の壮年会に参加していて、当時の福島総代の姿を見て、浄土真宗はこのような人を作るのだと思ひ、間違いない宗派だろうと感じました。真宗の凡夫ということが段々理解できるようになり、どこまでも自分勝手な人間の限界を感じていましたが、ひろさちやさんの講演で「和顔愛語」という言葉からお寺でステッカーを作り配ったのを見て、宗門がなんで法然が選び取った念仏でなく八正道を薦めるのか、不思議に思いました。

そのころ西川千麗さんという京都の舞踊家が毎年東京で公演をしていたのですが、在る年、「阿留辺讖夜宇和」という明恵上人の御言葉の舞を演じ、明恵上人が『摧邪輪』という書で法然上人の「選択本願念仏集」を

真っ向から批判したことを知りました。仏陀に戻りたいと言っていた上人、仏典から浄土を選び取った法然上人。大乘・小乗さらに自力・他力と仏陀釈尊を思いながらあまりに食い違う思想に学ぶことが増えました。

仏教とは究極学問ではないので、助からなければだめであり、なんで助かってるかという根拠をはっきりと示せばいいのですが。ケネス田中さんが、人間は泳がなくても海に沈まないと言いました。

人は137億年の歴史を持つ宇宙の中、幾千ある銀河系の中のまたその中の千ある恒星の中の太陽系に属した45億年前に生まれた地球に誕生し、またたった300万年前くらいから猿人類として存在してきました。

ひろさちやさんが仏教で大事なことは、こだわらない事と言いましたが、つまらない事にこだわっていると自分が見えません。今自分がいる、そのことが仏法の働き。法そのものかもしれません。阿弥陀様は西にもいるでしょうし、夢のなかにも出てこられるでしょう。また深川倫雄和上の言われたように胸のなかにもいるのではないのでしょうか。

「安楽浄土に入りつれば、すなわち大涅槃をさるとも、滅度に至るとももうすは、み名こそ変わりたるようなれども、これみな法身と申す悟りを開くべき正因に、阿弥陀の御誓いを法蔵菩薩われに回向したまえるを往相の回向と申すなり。」と親鸞上人も述べています。聴聞を重ねることはもちろんですが、法身をもとめる別の努力も今の病んでいる現代人には必要かもしれません。(越田 修一郎 記)

11月7日、壮年会法座での会員発表-3「自信教人信について」November



「私の自信教人信について、私は「漢方養生」についてお話ししました。

この「漢方養生」は昨年1年間、月に一回、外科の先生、内科の先生、漢方の先生が主催された勉強会があり、そこで教わったものになります。内容は自律神経について、「寒体質」と「熱体質」について、そして1年間の食事の摂り方と最後にそれぞれの体質に合わせた食物とその効用を発表させていただきました。

日本の「漢方医学」は、3世紀頃に朝鮮半島を経て伝えられた、中国の伝統医学「中医学」が、その後、日本で独自に発達し伝承されてきたものです。

その昔、武家では家ごとにお抱えの医者がおり、長年の経験から、家系特有の体質に合った対処法や養生法が確立されていました。

しかし、戦国時代にその方法が外に漏れると、戦の勝敗にも影響しかねないという理由から、養生の方法は書

物などには残されず、門外不出のまま親から子へと、ひっそりと伝承されました。

「自分の家では冬になると、おばあさんが毎年〇〇を作って、冬の間の保存食としていた」という生活の知恵も、実はその家に伝わる養生法の名残だったかもしれません。

早寝早起き、バランスの取れた食生活に、適度な運動が健康によいことは誰もが知っています。

しかし、現代の多忙な生活環境や職業によっては、健康的な生活など「無理がある」、また「わかっていてもできない」ことも多いのではないのでしょうか。

そんな忙しい毎日でも、「どうしたら元気になれるか」を考えたのが、この「漢方養生」になります。

「漢方養生」が皆様の健康に少しでもお役に立てばと思ひ、発表させていただきました。

(光本 浩昭 記)

※詳しい資料は、中原寺にお問い合わせください。

感話
シリーズ-30

山伏弁円の上宮寺・鷲元師の法話から
“蓮如上人様お通り!!”
7月19日(日)常例法座 午後1時



ご法話のテーマの一つが浄土真宗中興の祖、蓮如上人の肖像画「御影」を京都・東本願寺から福井県・吉崎別院までの「蓮如上人御影道中」に参加された体験談でした。「御影道中」は毎年4月頃行われ、340回目の平成24年4月17日～23日(6泊7日)の御下向に参加されたそうです。

“蓮如上人様お通り!!”“蓮如上人様お通り!!”の掛け声で「御影」を乗せたりヤカーを30人が引き、各地の会所70カ所に立ち寄り、讃仏偈に短い法話を聞き、かつて蓮如上人が歩まれた道を一路吉崎別院まで240キロの行進です。

この厳しい遠路の参加者は60～70歳代が中心で、一番の「ツワモノ」は先導を30年以上務める、健脚な83歳の方で、皆は寺の本堂に雑魚寝でも布団で寝られたが、この方は皆とは別で、何と「本堂縁の下」に泊まっていたそうです。途中はいろんな方と交流があり、最終日の7日目に吉崎別院に到着時は疲労困憊だったが、達成感からやったぞ、やっと着いたぞとナマンタブ、ナマンタブと念仏が溢れ出たそうです。ところが周りの方々は意外と静かで、何方からか、それは「カラ念仏だ」との声が聞こえ…エ、エ、エどうしてだ!! 蓮如上人様はお念仏を喜ぶ筈だと、その時は無然としたそうです。

後日に冷静になって考えてみると、今回の「御影道中」参加は何だったか。自分が京都から歩いて大変だったことで、知らず知らず思い上がっての念仏となり、「カラ念仏」とのご指摘を頂いたのは、蓮如上人からのお諭しであったと気づかれ、先の「ツワモノ」の御同朋からは「御影道中」とは蓮如上人のお徳を頂いて歩いているのだ!!、蓮如上人の当時を偲べば、贅沢は言えない有難いことで、言葉の念仏から「体で念仏」という事をこの道中参加で頂いたそうです。



弁円の 真似する人は 多けれど 明法房と なる人ぞなし

“御影道中”にご一緒させて頂いた気分です。南無阿弥陀仏 (入月 正 記)